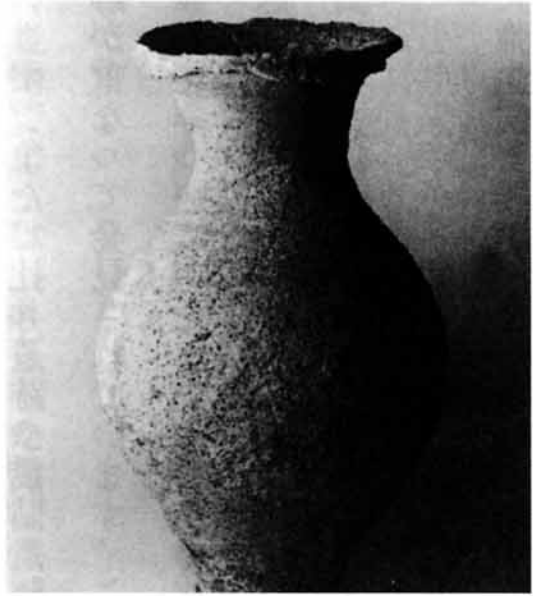


(二) 名古山の住居跡あと（弥生時代）

弥生式土器

今から約二千年前、紀元前三世紀から紀元後三世紀までの約



弥生式土器（辻井遺跡出土）

六百年間を弥生時代といえます。すつきりした円形に仕上げ、縄文式土器よりも高い温度で焼いた、赤味がかつたかっ色の弥生式土器が用いられるようになった時代です。

弥生時代には、大陸から稲作いなさくや金属きんぞく器きも伝えられ、日本の社会は大きく変

化しました。農業をする村ができ、その村がだんだん大きな集団に統一されていったのです。

弥生時代の遺跡は、姫路市内で約五十か所も発見されています。縄文時代から続いた辻井遺跡や橋詰遺跡のほか、産業道路から手柄山公園へ入る道路の一带にあった小山遺跡、手柄山から北へ山陽本線をこえたところにある三菱電機みつびしでんき

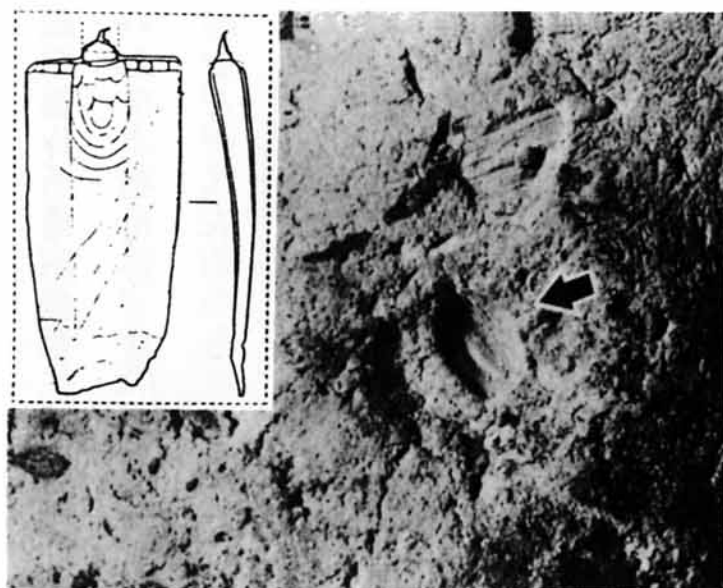
姫路製作所構内の千代田遺跡、山陽本線姫路駅の東で線路の南北にまたがって
いた市之郷遺跡、また御着駅の北で国道をこえたところにある国分寺台地遺
跡などが代表的なものです。



名古山に復元されていたたて穴式住居

たて穴式住居 一九五九年

(昭和三四年)、名古山で墓地公
園の工事中に二つの住居跡が発見
されました。ほぼ完全に残ってい
た一つは、平面が長径八メートル、
短径六メートルのだ円形で、屋根
を支える柱の穴が四つあり中央に
は炉の跡がありました。幅が約
一・五メートルの土の段が一周し



もみの跡がついた弥生式土器と木製のくわ
(長越遺跡出土)

ており、雨水が入らないようになっていました。土の段には、約二メートルの間隔で屋根の骨組みになる棒ぼうをななめに立てていたようです。

このような住居は、地面を掘り下げて造られているのでたて穴式住居といえます。小さな出入口が一つあり、夜は、それをふさぎました。屋根も厚くふいてありましたから、炉で火をもやしておけば冬でもかなり暖あたたかく過ごせたようです。

稲作のはじまり 手柄山の南、

飯田集落の北端ほくたんにある長越遺跡ながこしから、もみの跡がついた弥生式土器が出土しました。この遺跡からは、木製の

くわも出ています。

また、橋詰遺跡や小山遺跡、千代田遺跡などで、石ぼうちようが発見されています。それはかま型がたをした磨製の石器で、上からにぎり、稲いねの穂首ほくびを親指の腹とほうちようの刃はではさみ、こじるようにして稲を刈かったのです。これらの遺物から、弥生時代に稲作が行われていたことがわかります。

弥生時代の人々の米の調理法は、二つあったようです。こしきとって、底の方にいくつかの穴があげられた土器があります。これに布をしいて米を入れ、それを水の入ったかめの上に置いて蒸むす方法と、現在のように入水を入れて煮る方法です。発掘はっくつされた土器の内側に、こげついた米が炭になってこびりついていた例は、煮たことしよこの証拠しやうこです。蒸して食べるにしても煮て食べるにしても、弥生時代の米の調理は玄米げんまいのままでした。

稲作をするようになると、狩りや漁を中心にして暮らしていた時代に比べ、

何倍もの食料を手に入れることができるようになり、生活が安定してきました。それで、人口もしだいに増加し、人々は土地に住みついて村をつくり、集団生活をしようになりました。そんな中から、指導者や支配者となる者が現れてきたのです。

銅鐸^{どうたたく}

弥生時代になると、金属の道具も使われ始めました。外国では、銅



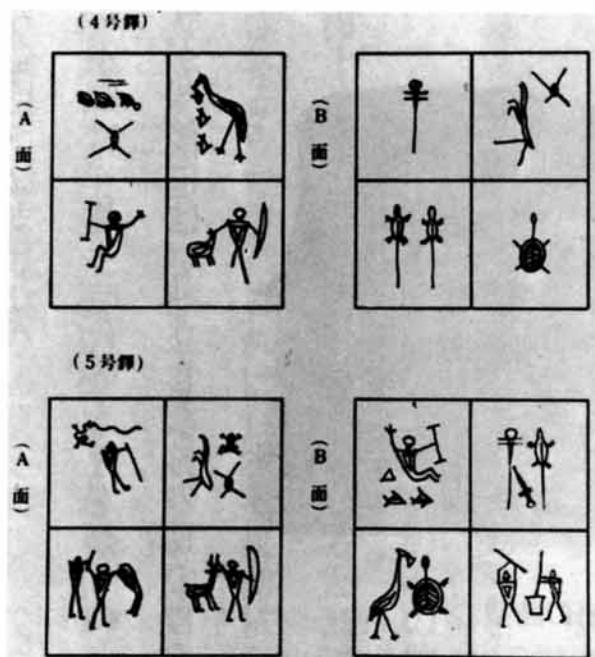
銅 鐸

(神戸市灘区桜ヶ丘出土 5号鐸)

にすずを混ぜて作る青銅器の時代が長く続いて、その後には鉄器の時代になるのですが、わが国には、青銅器と鉄器とがほとん

ど同じところに伝わってきました。

青銅器には、銅劍^{けん}・銅鉞^{ぼこ}（幅の広いやり）・銅鐸^{たつ}があります。わが国では、銅劍・銅鉞はもはや武器としては用いられず、祭りや儀式^ぎのときの道具として用いられました。鉄器は、生産用具や武器に用いられまし



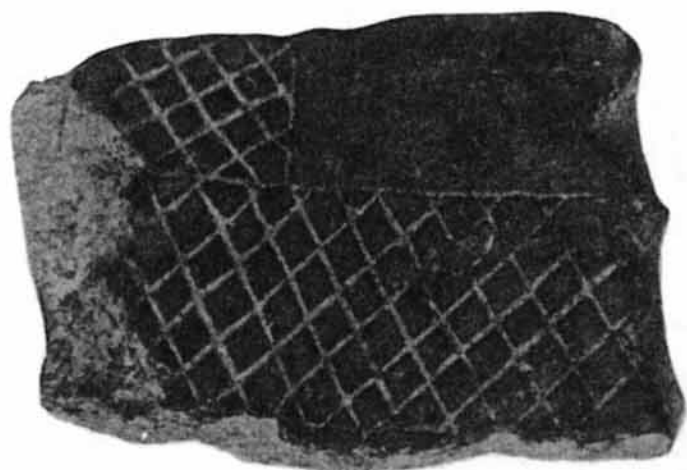
桜ヶ丘の銅鐸に描かれている絵画

た。名古屋の住居跡から、鉄の破^{へん}片が二個出土しました。くわの一部かと思われませんが、はっきりしません。

兵庫県は、銅鐸の出土数では全国第一位です。一九六四年（昭和三年）に、神戸市灘区^{なだ}桜ヶ丘町^{さくらがおか}の六甲山中腹から、一度に十四個

も発見されました。

銅鐸は、弥生時代の人々が祭りのときに鳴らした鐘かねであろうといわれていますが、後には、独立した村の長おさのしるしにも用いられていたようです。



銅鐸の石の鑄型

(名古屋山出土 たて5cm 横7cm 厚さ2.5cm)

銅鐸には、表面に模様のあるものもないものがあります。模様としては、水の流れやうずま巻き、のこぎりの歯のように三角形を続けたもの、網あみの目のものが多く見られます。また、中には絵のあるものもあります。

桜ヶ丘の銅鐸には、カマキリ・クモ・トンボ・スッポン・サギな

どの身近な小動物や、狩り・漁・米つきなど当時の人々の生活の有様ありさまが描かれ
ています。

銅鐸は普通ふつう、土器をとみなわないで、銅鐸だけが土の中から発見されます。
それは、地方の独立していた村が統合されて、小さな国ができあがっていくと
き、村の長たちちやうがこれまでの独立をすてたため、長のしるしであった銅鐸を、
地下に埋うめてかくしたからだろうといわれています。

名古屋山の住居跡から、銅鐸の石の鑄型の一部が一九六〇年（昭和三五年）に
出土しました。この鑄型で作ると高さが二十五センチメートルほどの銅鐸がで
きるそうです。これは日本で最初に発見された石の鑄型で、たいへん貴重な遺
物です。ところが、一九八〇年（昭和五五年）四月、今宿いまじゆくから、道路工事中に、
多数の弥生式土器の破片とともに、また銅鐸の石の鑄型の一部が発見されまし
た。これは名古屋山の鑄型と同じ年代で、弥生時代中期の後半（紀元一―二世紀）

のものであろうとされています。

このように、姫路では、銅鐸の鑄型が近距離きよりで二つも発見され、銅鐸を作っていたと思われませんが、今までに銅鐸は一つも発見されていないのです。